

現代の若者の平和への思いを探る

—遠藤久仁子演出脚色「その瞳の奥に輝く命の軌跡」

—ベトちゃんドクちゃんと共に歩んだ人々—を鑑賞して—

藤本文朗*、遠藤久仁子**

2020年9月29日受理（資料紹介）

はじめに

先日、7月16日某大学理工学部一回生169名、7月17日産業社会学部現代社会学科人間福祉専攻一回生132名の学生さんに「現代と福祉」の授業にて上記作品のインターネット配信授業を行い、学生さんたちの感想文を通して現代の若者の心境を探って行きます。以下その抜粋を紹介します。

作品内容については『創発』第19号(pp.79-87)をご参照ください。

1回生、Kさん

「こんなにも平和が脅かされているのに、なぜ平和運動は燃えないのか」と訴えている部分が一番印象に残った。河原正実が述べているように、私たち若者は戦争の怖さを知らない。怖さを知らないどころか、戦争とは私たちと遠くかけ離れたものであると認識してしまっている。目の前の楽しさめがけて生きることに精一杯で、私たちの国、日本が過去に犯した罪に見向きもしない生活を送っている。この場面は、このままではいけないと強く思うきっかけとなった。

今の日本が平和であることに私たち若者は気づけていないのではないだろうか。当たり前にご飯が食べられること、当たり前に通学していること、当たり前で皆が生きていること。そのすべてが奇跡であり、平和の象徴であるはずである。しかし、戦争を経験したことのない私たち若者は、被ばくを受け後

遺症を患っている人を目にしない限り、ベトナムを訪れ枯葉剤の影響を目にしない限り、平和でないことの想像ができずにいる。つまりほとんどの若者が今の生活が平和であることに気づけていない。いまだ、戦争の影響を受けている人から目を背け生きているといっても過言ではない。

平和が脅かされているのに平和運動が燃えない世界を変えるために私たちは何ができるのか。この講演を見る前にそう問われれば、正直に言えば、何もできないかもしれないと答えていただろう。しかしこの講演を見た私は違う。今の私は、「戦争について、戦争の被害者について、そして、平和について知ること」と答えることができる。たったそれだけの事と思われるかもしれないが、私はこの講演を通じて、知らないことの怖さを知ることができた。無知ほど怖いものはない、無知であることが人を苦しめ、世界を平和から遠ざける。平和運動が起きないのは、皆が平和について知らないからだと感じた。実際私はベトちゃんとドクちゃんについて一切知らなかっただけでなく、枯葉剤の影響によるものだとすることを考えもしなかった。

この場面が一番印象に残ったのは、何かを訴えかけられている気がしたからかもしれない。平和運動を起こしてほしいという思いの詰まった言葉だけでなく、平和について今一度考え直してほしいという思いも詰まっているのではないだろうか。この場面は私を大きく変えた。こんなにも心が動かさ

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：藤本文朗

〒590-0013 堺市堺区東雲西町1丁2-7

大阪健康福祉短期大学 名誉教授

**アトリエ セザンヌ

れるとは思ってもみなかった。ちっぽけかもしれないが、私はこれ以上の被害者を出さないためにも、もっと、平和について考えていきたい。

1 回生、Sさん

私は遠藤久仁子さん出演の演劇「その瞳の奥に輝く命の奇跡」を鑑賞して、ベトちゃんドクちゃんの生きようとする力と医師たちの努力に感動しました。特に印象的だったのは、各器官をどのようにして分け合うのかという問題についてです。なぜなら、医師たちも未知の手術の中で、二人の命を守ったことは素晴らしい生命力と医療技術だったのだなと思ったからです。

倉田正先生の話で、共有している他の器官について、肛門、生殖器の半分ずつをそれぞれ2つに分けるべきか？ドクさんに全て残し、ベトさんには人工肛門を設けるか？という問題を悩み続けていました。しかしながら、各器官の半分はベトさんのものでもあり、ベトさんの神経によってコントロールされていることから、ベトさんから切り離すことで壊死しないのか、またドクさんだけでコントロールすることができるのかという疑問も上がっていました。2人が共有している肛門について、大腸は完全にベトさんの血管系統によって動いていました。ドクさんは、大腸の入り口の部分と直腸の出口を残すしかありません。この2つの部分は離れた位置にあり、両方をつなぐには、今後ドクさんが自分で用を足せるようになることを保証する必要がありました。緊張状態の中、手術は15時間に及び、無事成功しました。

生死をかけた手術を終え、世界中が見守る中で、2人は目を見張るほどの速さで回復していきました。ベトさんは植物状態だったが、医師の支援を受けながら、手術後の19年間を生き抜きました。2007年10月6日、同病院で息を引き取りました。26歳でした。一方ドクさんは成長し、今も元気に暮らしています。

私は中学生のころに、学校にドクさんが来られて講義を聞いたことがあります。当時、とても衝撃的だったことは二人で一人だったベトちゃんドクちゃんが分離手術を介して今も元気で生きているというこ

とでした。子供のころの思い出や、約15時間に及ぶ手術について、手術後の暮らし、今の活動などいろんな話を聞きました。今回50分の映像でもあったように腸や肛門の分離、人工器官を使うなどの話もされていたのを覚えています。

戦争で枯れ葉剤が使われなければ、このような障害を持って生まれてくることはなく、ベトさんも脳症などを患い若くしてなくなることもなかったかもしれません。そしてベトちゃんドクちゃんは、別に特別な人ではなく、戦争が起これば誰にでも起こりうるのです。普通に送っていた日常に戦争が起こるのです。戦争のない世の中、そして核のない世界になることを願わなければならないと改めて実感しました。

1 回生、Mさん

ベトちゃんとドクちゃんの存在は、ベトナム戦争が罪のない一般市民にもたらした残酷な影響を日本中に知らせ、ベトナム戦争が終結して40年以上たった今でも戦争がもたらす恐ろしい被害を示している。彼らの存在は、中学、高校の歴史の授業や平和教育で教えられたので知っていたが、「ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会」が彼らの車椅子を作るために闘っていたことや日本の人々が実際にどのような支援をしていたかは、この動画を見て初めて知った。

私が一番印象に残ったことは、「どんなに障害があろうとも人間として生き、発達する権利を持っている」という藤本文朗さんの言葉である。約50分にわたる動画の中で、ベトちゃんとドクちゃんのために奮闘する人たちの姿を見たが、彼らが困難に直面しながらも試行錯誤して支援を実現していった理由は、彼らの活動の根底に藤本さんの言った言葉のような気持ちがあったからだろうと思った。福祉活動について考える時にいつも思うことだが、言葉で言うことは簡単でも実際に行動するのはその何倍も大変なことである。そのため、藤本文朗さんをはじめ「ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会」の人たちが、支援を根気よく続けていったことに大きな感銘を受けた。今後福祉について学ぶときに、藤本さんの言葉を忘れずに学んでいきたい。そして、支援活動を行う際には、人間性と愛情を持って行動したいと感じた。

動画の最後にベトナムの障害児教育について触れ

ていたが、市場経済の導入の結果、ベトナムでは福祉、教育、医療にシワ寄せがいつている。ベトナムでは、今なお福祉の恩恵に預かれる状態ではない子どもたちが多くいると言う。これは日本でも同様で、十分な福祉支援を受けられていない子どもは少なからず存在する。国を豊かにするためには経済の発展が不可欠であるが、経済発展だけが目的になってしまい、その地に住む国民を顧みないような政策では元も子もないのではないかと考える。人間は、みな人間として生き、発達する権利を持っているのである。福祉は、誰もがその権利を尊重されるように支援しなければならないし、国家は福祉が充実されるようにしなければならないそして、人の心の豊かさが、経済発展の中にいなくてももたらされる社会を作る必要があると感じた。

ベトナムとドクちゃんは人間が起こした戦争から被害を受け、人間の手によって救われた。壊すことも救うこともできるなら、人を救うために労力を使いたいと思った。

1 回生、Yさん

私は、この演劇を視聴して、自分の目指す福祉の在り方を再確認することができた。演劇の序盤で語られていたように、障害者でも、私たちのような、五体満足で生きている人間も、同様に、幸福になる権利はある、ということである。

そうはいつでも、私たちと障害者の中にあるのは、経験の差、である。演劇でもあったように、重度に障害を抱えていると、学校に通うことすら難しいのである。これは、私の知り合いの話になるのだが、ずっと家にいると、やりたいことばかり増えていき、世の中には憧れしかない、とのこと。それと同時に、出来ない自分の不運を嘆く日も多いという。私はそんな友人に、自分の話をよく語っている。友人がしたいと、やってみたいと語ったことすべて、私ができる範囲で実践をしている。それが正解なのか、私自身わからない。だが、その話を楽しそうにいつも聞いている。それが本当にうれしがっているのかは、本人しかわかり得ない。そのように思い出したら、キリがないのだが、私は、この友人と同じように悩みたいのである。

話を演劇に戻す。ベトナム、ドクちゃんを見て

「生きていても不幸なだけ」と吐き捨てた男性がいた。僕はそれを見て、価値観の違い、を強く感じた。障害をもった人のことを理解、考えようとしなかった人生を背負う人間というものは、そのような感想をもつのか、ということだ。今回のベトナム、ドクちゃんのことだけを上げて言えば、このような人間が生まれてしまった、と言えば失礼かもしれないが、原因は、同じ人間にあることを注目すべきなのである。同じ人間が責任を背負い、人類においての問題にすべき問題だったのである。もし、そうしたならば、今日での障害をもつ人間に対しての考え方が、全世界を通して少しいい方向に変わっていたのかもしれない。

今、私たちにできることは、障害をもつ人たちを見捨てないことである。ともに、同じ人類として、未来へ進むべきなのである。日々、日常は進化しているが、それは、私たち、満足に今を生きることが出来る人間限定の物事であることを自覚しなければならない。今、ただの学生である自分にできることは、福祉に対して、適切な理解をすることだと考えている。まだまだ勉強不足は否めない、そして、これから先、どのような社会にすべきかを思考することが、この四年間での目標である、とわたしは考える。この演劇を見て、私のこれからの日常の視点を少し増やすことができたことが、今回の収穫である。

一回生、Tさん

私が一番印象に残ったことは、障害者との関わり方の難しさである。障害者の一部には後天的に、自らの過失によって障害を負うことになった人もいるとは思われるが、多くの障害者の場合、先天的である。また、自らは過失がないにも関わらず障害を負うことになったのであると思われる。ベトナムドクちゃんに関して言えば、ベトナム戦争における枯葉剤の影響によって、先天的に身体が繋がっており、ベトナムドクちゃん自身には何の過失もないのである。このことから、藤本文朗氏が商社マンから受けた、ベトナムドクちゃんに対する差別的発言は全く的外れであり、本来攻めるべき対象は障害を持つ原因を作ったアメリカ軍であると思う。このように、自らの過失が原因でない障害者が、不適切な目で見ら

れるケースは今でも見られるであろう。

藤本文朗氏が河原正美氏を訪ねた際の障害者を特別視しない態度を聞いて、考えたことがある。それは、私は今までに、障害者がいる場面において、「周りの人と同じように接しましょう」という考え方を聞いたことがあるが、果たしてこれは正しいのであろうかということである。この考え方を聞いた障害者の周囲の人は、どこまで同じように接したらよいのであろうかと、迷うかもしれない。障害の程度によっては、日常生活においてある程度、補助が必要なケースもあると考えられるが、もし障害者自身でできることを周囲の人が補助しようとしたことで、障害者が「周りの人と同じように接してもらえない」と思ってしまうかもしれない。私はこのように、補助が必要であるかもしれないが、もし必要でなかったら失礼ではないかというジレンマから障害者との関わり方の難しさを感じる。

障害者の周囲の人が、障害者との関わり方に難しさを感じているのと同様に、障害者も、自身の周囲の人との関わり方に難しさを感じているのであろうと思う。ベトナムドクちゃんを見てみても、私の勝手な想像であるかもしれないが、分離手術には百名近くの専門家が関わり、募金によって数え切れない人々からの支援を受けて、感謝の気持ちとともにプレッシャーのようなものを感じているのではないかと思う。そのためには、教育の機会を設けるべきであり、ベトナムで障害児教育指導者を育てる課程ができたのは大きな一歩である。そこで学んだ人たちによって、障害者とその周囲の人の両方の考え方が広がることを期待する。

考察（藤本文朗）

全てのレポートがオンライン配信授業で見たものであり、真面目で好意的に見ての感想であり、もし教室で実際に公演が行われていたら、舞台と観客が一体となった、素晴らしい空気を醸し出していたらと思う。この公演に関わった中での感動もひとしお大き

かったと考えられる。

レポートの中身について言えば、1、ホーチミン市のホテルでの藤本文朗と商社マンとの会話、2、河原さん杉原さんの議論、3、それを発展させた国際連帯、4、臨床医倉田医師の科学的対応等、良く理解されている。

また、約5パーセント程度のレポートが、イ、中学校時代直接ドクちゃんの話聞いた。ロ、小学校の時代道徳の授業で学んだ。ハ、中学校の公民の授業で、ベトナム戦争とかがあって学んだ。二、テレビで見た等記されている。しかし私の経験では、認知度は1980年代、1990年代より少なくなっていると言える。それ故この授業は良かったと言える。多少不満があるとすれば、正面からの批判的なレポートがあっても良かったと言える。

（ベトナム戦争を仕掛けたアメリカの責任等々）いずれにせよ若者がレポート作りをとおして、憲法、教育基本法の理念に基づく、社会の主権者の認識から、先ずは選挙に行つて欲しいとかがえる。

追記すれば、この授業を担当された教授は「理工学部」の学生に福祉の授業を選択されている。本学ならではの事と考えられますが、ダイオキシン被害の事も書いてほしかったとのことでした。

考察（遠藤久仁子）

学生さん方のレポートを全て見せて頂き、思いもよらない反響にとっても喜んでおります。若い方々にこのお話をお伝えしたい、その思いのみでこの作品を作りましたが、お一人お一人のレポートの中に、今後の自分の生き方を考えていきたい、現代の平和について再度自分なりに考えていく、また福祉についての認識を新たに、福祉活動について自分なりに、今後協力していきたい等々。皆さんしっかり平和や福祉について考えていらっしゃることが分かり、これからの日本をしっかり背負っていただけるのではと期待しております。